

復興リレー講座（現地視察版：兵庫県内） 視察の実施記録・最終ワークショップ協議録



最終ワークショップ写真 1：意見交換会の様子

2023年9月12日 開催 於：佐用町

主催： 特定非営利活動法人 SEEDS Asia

協力： 特定非営利活動法人 ジャパンプラットフォーム
豊岡市・丹波市・佐用町の市民団体・関係者の皆様

目次

1.	謝辞	1
2.	視察プログラム参加者	2
3.	視察プログラム全体スケジュール.....	4
4.	視察の記録	7
1)	視察先①豊岡市	7
2)	視察先②丹波市	12
3)	視察先③佐用町	14
5.	ワークショップ協議録	16
1)	はじめに	17
2)	視察で印象に残ったこと.....	17
3)	視察を踏まえて、これから長沼で実施あるいは検討していきたいこと	29
4)	講評.....	39

1. 謝辞

この度は、復興リレー講座（現地視察版）にご参加・ご協力をいただき、誠にありがとうございました。兵庫県の水害被災地における復興まちづくりの実践事例を拝見し、その学びと、交流のひとときを共有させていただいたことに、感謝の気持ちで一杯です。

この視察プログラムは、まちづくり活動の実施・実行・管理において、「ヒト・モノ・カネ」の調達と維持は、不可欠であるという観点から、その課題に対応するノウハウやヒントを学び、共有し合う場として企画されました。今回は、水害を経てもその土地で暮らしを営み、災害さえも「地域資源」の一つとして位置づけながら、まちの魅力を高めるべく、まちづくりを担う兵庫県の豊岡市、丹波市、佐用町の方々より、ご知見を共有いただきました。それぞれの地では、災害により人口減少の課題がより顕著となる中、地域住民や交流/関係/回帰人口など、多様な人々の参画を促す活動や発信の工夫、そして課題の解決や魅力向上に向けたヒト・モノ・カネの調達の手法と内外の連携の在り方について、各地の状況に応じた具体的な事例を共有いただきました。

視察プログラムの最終日には、作用町にて振り返りをおこない、この視察と交流からの学びはどのようなものだったのか、そして長沼地区における復興まちづくり計画の実行・具体化に向けて、どのようなことが今後のまちづくりの活動を進めていくヒントになったのかを協議しました。本報告書は主にこの振り返りで得たことについて、ご参加いただいた方々のお言葉をできるだけ忠実に残すべく、協議録として記録しています。

まちの特性はそれぞれ異なる部分もありますが、得られる教訓や優良事例は、皆様が長沼地区の復興まちづくりを進める上で新たな示唆となることを、信じて止みません。この機会が、長沼地区の復興まちづくり計画の実現可能性や活動の成果を一層高める大切なステップになれば幸いです。

尚、本視察プログラムは、認定特定非営利活動法人ジャパンプラットフォームのご支援と、豊岡市、丹波市、佐用町の皆様、長野市長沼地区住民自治協議会事務局の皆様のご協力により実現することができました。また、オンラインにてご指導いただきましたアドバイザーの上田和孝先生、そしてご参加いただいた長沼地区の皆様を含め、ここに改めてご協力いただいた関係者の皆様に改めて深く感謝を申し上げます。

令和5年9月
認定特定非営利活動法人 SEEDS Asia

2. 視察プログラム参加者

市	御所属	お名前
長野市	長沼地区住民自治協議会 まちづくり委員会 委員長	小川 喜彦 様
	長沼地区住民自治協議会 まちづくり委員会第1グループリーダー	関 博之 様
	長沼地区住民自治協議会 まちづくり委員会第2グループリーダー	岩崎 弘幸 様

市	御所属	お名前
豊岡市	豊岡まち塾 副塾長/豊岡まちなみ連盟会長 全国町並み保存連盟理事	松井 敬代 様
	豊岡まち塾/豊岡市地域おこし協力隊	ハミルトン 塁 様
	砂防の父 赤木正雄展示館 館長	赤木 新太郎 様
丹波市	丹波市復興女性プロジェクト会ほんぼ好 代表/ ひなたぼっこカフェ、農家民宿ひなたぼっこ	今井 頼子 様
	丹波市復興女性プロジェクト会ほんぼ好 メンバー	余田 すず代 様
	丹波市復興女性プロジェクト会ほんぼ好 メンバー	西村 恭子 様
	丹波市復興女性プロジェクト会ほんぼ好 メンバー	荻野 美千代 様
	丹波市復興女性プロジェクト会ほんぼ好 メンバー	荻野 典子 様
	こんちゃん農園 代表/ひなたぼっこカフェオーナー/ 農家民宿ひなたぼっこ	今井 貞夫 様
	こんちゃん農園 メンバー	近藤 喜作 様
こんちゃん農園 メンバー	吉見 成人 様	

	こんちゃん農園 メンバー、元北岡本自治会会長	黒田 拓治 様
佐用町	兵庫県佐用町 元平福地域づくり協議会員/さよう 防災リーダー連絡会会長/平福文化と観光の会役 員	春名 政男 様
	元佐用町企画防災課長 江川地域づくり協議会センター長/佐用日本語学校 顧問	久保 正彦 様
	佐用町佐用ダスキンの社長、(株)かのね代表取締役/ 作用町内小学校語り部	四方田 康次 様
	元佐用町消防団長、(有)稲田農機 常務	松田 芳夫 様
	川田仏具仏壇店代表取締役 (株)かのね役員	川田 嘉男 様
	佐用町観光協会会長 (株)かのね副社長	北村 広樹 様
	上郡町地域おこし協力隊	野邊 友紀 様

3. 視察プログラム全体スケジュール

	時間		講師など
1 日目 9/10	7:38	長野駅発【北陸新幹線かがやき 501 号】	
	8:43	金沢駅着	
	9:02	金沢駅発 JP【特急サンダーバード 14 号】	
	11:10	京都駅着	
	11:25	京都駅発【特急きのさき 5 号】	
		昼食（電車内）	
	13:38	豊岡駅着→荷物【豊岡グリーンホテルモーリス】	
	14:00	豊岡稽古堂（会議室 1）	
	14:05	座学：豊岡の災害とまちづくり 1925（T14）北但馬地震、 2004 年（H16）台風 23 号	松井 敬代 様 ハミルトン 塁 様
	15:30	車両移動：砂防の父 赤木正雄展示館へ	
	16:00	砂防の父 赤木正雄記念館 訪問	赤木 新太郎 様
	17:00	車両移動・まちガイド（車両二台移動含む）：円山川周辺地区（例：三江地区・立野地区（堤防強化現地再建）・一日市地区・六地藏地区（河川改修により集団移転）・赤石地区（土地改良＋農薬→コウノトリ絶滅→環境保全によるコウノトリ復活と農作物のブランディング）など）	松井 敬代 様 ハミルトン 塁 様
	17:30	終了	
18:00	夕食		

	豊岡泊【豊岡グリーンホテルモーリス】 〒668-0032 兵庫県豊岡市千代田町 6-32 TEL: 0796-23-5551 / FAX: 0796-23-5552 URL: http://www.hotel-morris.co.jp/	
--	---	--

	時間		講師など
2日目 9/11	8:00	豊岡発【豊岡グリーンホテルモーリス】	ジャンボタクシー 74分 日交タクシー豊岡
	9:30	丹波市着：ひなたぼっこカフェ 兵庫県丹波市市島町上鴨坂 850	
		ぼんぼ好さんによる講義・案内： 2014（H26）年8月豪雨災害からの「おいしい・楽しい」まちづくり	今井 頼子 様 他
		こんちゃん農園さんによる案内：森林管理と豪雨災害について学ぶスタディツアーの実践、農業体験を通じた交流人口・関係人口の創出など	今井 貞夫 様 他
	12:00	ランチ：ひなたぼっこカフェ	
	13:00	丹波市市島町発	ジャンボタクシー 105分
	16:00	佐用町着【NIPPONIA 平福宿場町】 〒679-5331 兵庫県佐用郡佐用町平福 697-1 TEL: 090-3053-0700	
	16:30	春名さん+地域の方々による講義・案内・座談会： 2009（H21）年台風9号による水害と「歴史的資源を活かしたまちづくり」	春名 政男 様 他
	18:00	夕食	
19:00	川端土蔵群のライトアップ視察・まちガイド	北村 広樹 様 他	

3日目 9/12	8:00	リレー講座の各自まとめ・発表	オンラインで接続
	10:00	佐用町出発	所要時間 60 分 さようタクシー
	11:30	姫路駅着（新幹線口）	
	13:11	姫路駅発【ひかり 510 号】	
	14:42	名古屋着	
	15:00	名古屋発【特急しなの 17 号】	

尚、兵庫県やそれぞれのまちの紹介、視察メモを含めた「視察ノート」はこちらの[リンク](#)・QR コードから



4. 視察の記録

1) 視察先①豊岡市

長野駅から出発し、電車「きのさき号」に乗って、京都駅から豊岡駅に向かいました。

豊岡市では、豊岡まち塾副塾長/豊岡まちなみ連盟会長/全国まちなみ保存連盟理事の松井敬代様、豊岡まち塾/豊岡市地域おこし協力隊のハミルトン壘様より、北但馬地震（1925年）と水害（特に2004年）後のまちづくりについてご講義をいただきました。

北但馬地震後の大豊岡構想の中、進められたRC造の建築物が、現在は「レトロなまち並み」として全国に知られ多くの観光客を呼び、建築系の大学生など交流人口を生み出していることが紹介されました。また、勾配が殆どない円山川の氾濫の特性や肥沃な土地を活かし、生物多様性に配慮した湿地帯の整備により、減農薬を可能にした新農法の開発と、野生コウノトリの生息地として、自然と共生するまちとしてブランディングしていったことが紹介されました。

豊岡市（豊岡まち塾さんによる講義とまち案内）で得た学びのポイント

■ 災害後に「よりよいまちをつくる」官民一体の取り組み

北但地震後の大豊岡構想と民家の防火耐震家屋化、2004年台風23号後のビオトープ整備や新農法の開発による「自然と生きるまち」のブランディング

■ 復興建築の資源化

100年の時を越えたレトロなまちなみの保存を通じた交流・関係人口・移住人口の増加



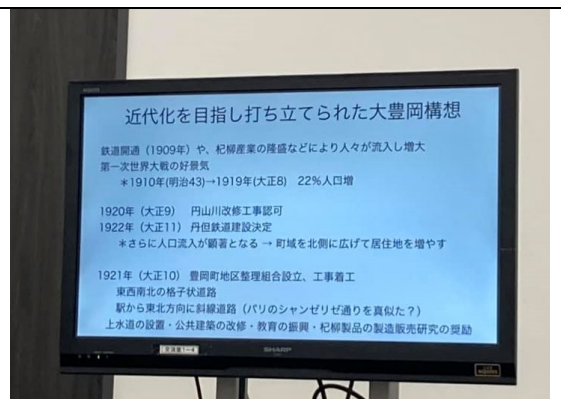
【豊岡市】会場となった豊岡稽古堂。
旧豊岡町役場で北但馬地震後の復興建築群の一つ



【豊岡市】会場となった豊岡稽古堂の会議室で実施された。二階は市議会会議場であるが、他の場所は基本的に市民に開放された空間



【豊岡市】豊岡まち塾副塾長/豊岡まちなみ連盟会長/全国まちなみ保存連盟理事の松井敬代様による講義



【豊岡市】北但馬地震後の大豊岡構想



【豊岡市】講義に耳を傾ける参加者



【豊岡市】豊岡市地域おこし協力隊のハミルトン様による講義



【豊岡市】度重なる水害や、水との共生としてコウノトリの再生やビオトープに関連し、新しい農法「[コウノトリ育むお米](#)」による農作物のブランディングについてのご講義



【豊岡市】2004年の台風23号の概要

豊岡まち塾さんによる座学の後には、「砂防の父 赤木正雄展示館」を訪問し、丸山川の氾濫を

何度も経験した赤木正雄氏(土木の偉人のお一人です)の想いと功績に触れました。

また、登録有形文化財となっている赤木家住宅には、水害を考慮した嵩上げと玄武岩を活用した弊や、水害防備林としての竹林、貯水タンク、救命ボートとなる小舟などが整備されているほか、庭には栗やナツメヤシなど、備蓄としての役割も持つ果実が育てられています。

移動途中には、コウノトリの生息地となっているビオトープもご紹介いただきました（ただし、その日は一部大雨となっており、コウノトリには出会えませんでした）。

また、計画していたことではありませんでしたが、プログラム当日の夜には地域の方々と移住された方々のご尽力により再開した豊岡劇場を活用して、ラグビーワールドカップのパブリックビューイングが行われており、移住者と住民が協力して運営している豊岡劇場¹の維持修復へのファンドレイジングの実践も目にすることができました。

	
【豊岡市】円山川の氾濫原はビオトープとして整備されている ^{2 3}	【豊岡市】赤木正雄記念館（重要運家財赤木家住宅）入口にて水害の記録を伝える館長赤木新太郎氏

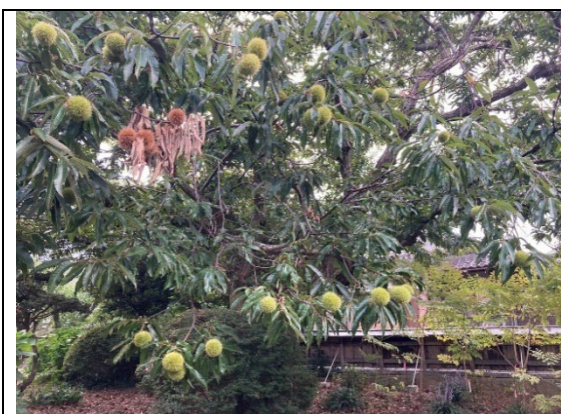
¹ 豊岡まち塾「1927年に芝居小屋として建てられたRC造の復興建築。八芒星のリーフや外観の意匠に当時の面影が残る。80年以上親まれてきた映画館であったが、2012年に閉館。2014年に地元有志により復活プロジェクトが立ち上がり再開。映画上映だけではなく、新しい場として活用されている。」あるいてめぐるとよおかのまち地図より

² 国土交通省 円山川水系自然再生計画書（平成17年）

<https://www.kkr.mlit.go.jp/toyooka/saisei/keikaku.pdf>

³ 環境省「生物多様性保存上重要な里地里山」

https://www.env.go.jp/nature/satoyama/28_hyogo/no28-9.html



【豊岡市】庭木として様々な果樹が植栽されている



【豊岡市】裏庭の水防竹林の紹介。かつて生活用水として活用していた円山川の水には魚も生息。



【豊岡市】水害時には建築資材・建具も流されるが、全てに住所や名前を記載しておくことで後の発見・再利用を可能にする当時の慣習の紹介



【豊岡市】赤木正雄の生涯をビデオで学び「砂防」の歴史を紹介。円山川の度重なる氾濫と、幼い頃に新渡戸稲造から洪水の課題解決の重要性について学んだことが、後の功績を生んだことが紹介



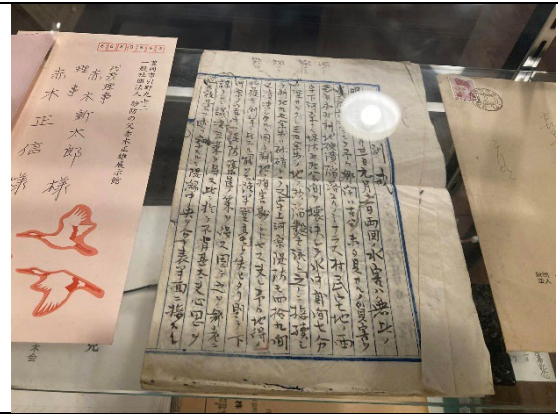
【豊岡市】赤木正雄の様々なエピソードをパネルで紹介



【豊岡市】赤木正雄の様々なエピソードをパネルで紹介



【豊岡市】赤木正雄記念館の役割・活動・成果や背景にかかわる交流会・質疑応答



【豊岡市】赤木正雄氏が遺した水害の訓戒の文書。玄関には北但馬地震の記録が石にも掘られており、記念館には訓戒に基づく工夫が可視化され、継承されている。



【豊岡市】赤木正雄記念館前



【豊岡市】赤木正雄記念館横の貯水槽の役割を持つ堀



【豊岡市】赤木正雄記念館入口にて記念撮影



【豊岡市】復活した豊岡劇場でラグビーワールドカップのパブリックビューイング（住民の方が私費で投影権を購入し、無料で開放）。同時に劇

	場の運営費の寄付を依頼
--	-------------

豊岡市（赤木正雄記念館）で得た学びのポイント

■ **浸水を覚悟した家屋・居住の在り方と在地の知の継承**

玄武岩など地元の資源をいかした嵩上げと、災害時の食糧確保を見据えた植栽の在り方や水防竹林の整備

■ **水害常襲地としての記憶の継承、次世代の育成拠点**

円山川というリスクの高い土地だからこそ生まれた偉人の功績を知ること、まちへの誇りを涵養し、同時にまちのリスクを知る（河川改修による洪水リスク忘却の対応）

2) 視察先②丹波市

	
<p>【丹波市】平成 26 年の豪雨の状況と、災害を契機とした丹波復興女性プロジェクト会ぼんぼ好の設立経緯の説明</p>	<p>【丹波市】事業の指針と活動概要の紹介</p>
	
<p>【丹波市】イベント出店や交流事業についての紹介</p>	<p>【丹波市】イベント出店や交流事業についての紹介</p>

	
<p>【丹波市】北岡本自治会の取り組みと教訓、そしてこれからの希望を話す黒田氏</p>	<p>【丹波市】長沼地区の地理的条件や災害当時の状況を紹介する小川委員長</p>
	
<p>【丹波市】ぼんぼ好のみなさんが講義の合間に作ってくださった丹波の恵みを活かした美味しいランチ</p>	<p>【丹波市】ぼんぼ好とこんちゃん農園の皆さんと集合写真</p>

丹波市（ぼんぼ好&こんちゃん農園・北岡本自治会）で得た学びのポイント

■ **被災を機とした、まちの資源の利活用**

「何か面白いことやろう！」からの持続可能な活動（炊き出し→お弁当事業、農地の被災→一部を共同農園化、土砂災害→住民参加による森づくり・山の管理活動）。

■ **多様な主体のまちづくりの主体と多様な参画の姿**

女性が主体となってまちの賑わい創出や経営を実現。「持ち出しはしない」、の指針とその実現により「資源・ファン・資金」の好循環が生まれる。メンバーには仕事をしながら参加することもあり、多様な参画の層が許容される多様性を大切にする組織。

■ **個人・団体・行政の、役割と協力による「やりたいこと」の実現**

こんちゃん農園：減農薬・オーガニック野菜の栽培・販売・体験農業の場の創出による関係人口・交流人口の増加。

ぼんぼ好：こんちゃん農園の農作物を活かしたお弁当の販売、イベント出店・交流活動など。

行政：行政の功績にもなり得ることを住民が提案し、共に実現する（べったり依存はしない）

3) 視察先③佐用町



【佐用町】長沼地区の皆さんの歓迎



【佐用町】講義の様子



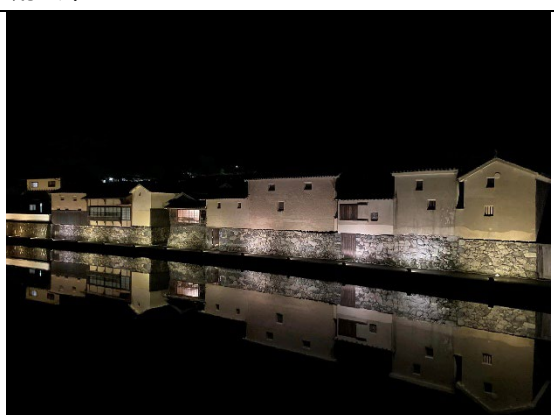
【佐用町】まちづくり会社の組成の設立に至る背景の説明



【佐用町】当時の消防団長も参加し、車座で交流を深めた



【佐用町】まちの重要な資源となっている川端土蔵群の被害



【佐用町】佐用町平福の川端土蔵群。大雨にもかかわらず、観光協会とまちの方々によりライトアップを特別に披露いただく。



【佐用町】長沼地区より災害記録の贈呈



【佐用町】令和元年台風 19 号の際、長沼地区津野区でボランティアに行っていたという野邊友紀さんが、佐用町の近隣自治体である上郡町の地域おこし協力隊として入っており、佐用町の春名さんのご紹介でご来場

5. ワークショップ協議録

<会場> 兵庫県佐用町 NIPPONIA 平福宿場町

■参加者

長沼地区住民自治協議会まちづくり委員会 委員長 小川 喜彦氏

同上 グループ1リーダー 関 博之

同上 グループ2リーダー 岩崎弘幸

■ゲスト・コメンテーター

兵庫県佐用町 元平福地域づくり協議会員/さよう防災リーダー連絡会会長/平福文化と観光の
会役員他

■プログラム企画・ファシリテーター

SEEDS Asia 事務局長 大津山 光子

<オンライン>

■専門家・講評

国立大学法人新潟大学工学部 准教授/特定非営利活動法人 SEEDS Asia アドバイザー/
特定非営利活動法人新潟国際ボランティアセンター運営委員・理事/一般社団法人日本インターナショナル・サポート・プログラム理事

1) はじめに

大津山：改めて復興リレー講座現地視察版にご参加いただいたことに感謝申し上げます。
昨日の夕方からの講義に引き続き、佐用町の春名様にこの最終ワークショップにお越しいただいておりますことを深く御礼申し上げます。また、今回オンラインでご講評ということでご参加いただいている上田先生にも感謝いたします。

この視察プログラムは、ジャパンプラットフォームや各地域や専門家の方々のご支援とご協力によって成り立っています。そこで、今日は皆さんの視察から得た学びがどのようなものであったか、視察の証として記録し、そしてインターネットを通じて発信していきたいと考えます。どうぞよろしくお願いいたします。

2) 視察で印象に残ったこと

大津山：では、印象に残ったことということで始めたいと思います。
まず、全体を通して印象に残ったことを、三つから四つほどお一人ずつご発表いただきます。その際には付箋を活用し、一つの項目に一枚記載いただき、後に順番にご発表いただくことにします。

<各自記載>

大津山：では、ご発表よろしいですか？では、こちら岩崎さんから。

岩崎：長野市長沼から来ました。岩崎です。
では印象に残ったことということで、とりあえず三つなんですけども。
まずは、丹波市の「こんちゃん農園」のところで感じたことで、災害直後にそれぞれ土地を三割出し合ったということが、衝撃的でした。私としては、やはり長沼でも使っていない土地、耕作放棄地なんか非常に増えていて、その活用というのは、非常にまちづくりの中で悩んでいるところではあるんです。それを災害直後にやったという判断が、本当にすごいなと思いました。そういうことを思いつくこともすごいし、住民の方が理解して提供してくれる方がいたということも、非常に感動というか、印象に残りました。

大津山：災害直後にも拘わらず、住民の方々が先を見据えた判断を協働で行えたことはすごいですよね。ありがとうございます。では次は関さん。

関：長沼のまちづくり委員会の関です。よろしくお願いいたします。
私はですね、まずあの豊岡のビオトープが非常に印象に残っています。なぜかっていうと、すごい人々と川との距離が近いって感じがして。今長沼では川との距離が非常に離れている。川が怖いものだから、川に近づかないようにしようとか。そんな風なことになっている中で、あのビオトープということで自然と共生していこうというような考え方っていうのが今後やっぱり長沼にも必要なことではないかなと、

感じました。

大津山：なるほど。川と生きる、自然との共生の視点ですね。それでは小川委員長、お願いいたします。

長沼地区のまちづくり委員会の小川です。私はこの作用町の活動されている中で、まちづくり会社を独立され、それによってまちづくりを進めておられるというそれが非常に印象に残りました。この宿泊施設やまち並みとか、空き家を使って、ということで非常に印象に残っています。

大津山：まち並みの風景をうまく活用するその仕組みというか、会社を作るという体制づくりというところが一つ大きな発見というか学びですね。ではまたワラウンドいきましょうか。同じ順番でいいですね。はい、それでいきましょう。

岩崎：先ほど小川さんから出たところですが、やっぱりその、まちづくりをするっていう会社を立ち上げてってところが非常に勉強になった、というか勇気を持たせてもらったというか。こういうまちづくりの方法があるんだ！ってということを知る機会になりました。

大津山：ありがとうございます。まちづくりの担い手、主体には多様な形があるってことを見させていただきましたよね。

関：えっと、私はですね、あの「ぼんぼ好」のおばちゃんパワーですね。長沼でも「津野女子会」という女子会があって。私はその会議には参加してないんで、あれなんですけど、長沼の女子会もあんな感じでやってるのかな、と思いました。けど、あの食事を食べている時のあの活発な姿を見て、本当に楽しみながらまちづくりに参加しているんだと。そんなところを感じました。長沼でも、もっとおばちゃんたちの力を引き出すことができたらな、と。津野の女子会だけではなくて、他の地区のおばちゃんたちのパワーを吸い上げるようなことがあってもいいのかなって感じました。

大津山：ありがとうございます。まちづくりの主体として女性をもっと巻き込む、っていうのはすごく大切ですね。では次に小川委員長。

小川：同じく丹波市ですが、行政との良い関係を築いているところで、このお話が非常にためになったかなと思っています。行政への良い事業提案ですね。それを繰り返していくことによって、お互いにウィンウィンの関係ができていく、ということなんですけど、そういう点がとても参考になりました。それは、後ろの山に対して非常に課題を抱えているということが、住民も行政も背景にあって。それをいかに解決していくかというところに、その行政とのいい関係が必要だというそういうところから来ているのかな、と。

大津山：行政との共通の課題認識の中で、行政に要望ではなく、行政にとって業績となりうるような

事業提案し、より良い形である意味「使っていく」ような、良い関係・事例を教えていただきましたよね。ありがとうございます。もうワンラウンドいけますかね。



最終ワークショップ写真 2 : 意見交換の様子

岩崎：さっき豊岡のあのビオトープの話もありましたけど、作用町も同じで、あの夜も川のライトアップを見させてもらいましたけど、川をこう、うまく資源として使っていることが面白いな、と、多分住民の方々も活かそうっていうふうに思っているんだな、という感じがしました。

大津山：水害を事例に、水は脅威でありながらも、資源として生かしていくということですね。

岩崎：もちろん長沼、千曲川とはやっぱりあの川の大きさも全然違ったけど。でも、私の昔の頃はもっと多分もっと川が近かったような気がするんですよ。でも、私の子どもなんかもそうですけど、生まれてから一切川に近寄ったこともないし近寄らせてもいなかったし。ましてや、水害があったので、さらにあの一遠い距離になっちゃっているのかなと。その点がちょっと長沼と、こちらの作用町や豊岡の大きな違いなのかなって思ったところですね。

大津山：確かに川の規模は大きく違うとは言え、かつてはあったはずの川や生き物への距離は遠くなっている、ということですね。せっかくなので、ここで春名さんにちょっとお伺いしたいんですが。佐用町で

水害が何度も経験する中で、住民の方々はなぜ川との距離を隔てるような思想あるいは、決断はしてこなかったのでしょうか。たとえば、ここに大きなコンクリートの堤防を立てて、水が絶対に出ないようにしよう、みたいな思想にはなってもおかしくないと思うのですが。

春名：この作用川は昔から「暴れ川」って呼ばれていましてね。水害はしょっちゅうなんですよ。ただ、水害とはいえ、ここまで（台風 9 号）の大きな水害ではなかったけれども。床下の浸水は日常茶飯事になっていました。結局、特に平福の人は、水と共生というか、水と常に一緒に生活してきたと。だから、水利、というか水に対するマナーというのは、非常にいいところなんですね。

だから、佐用川しかり、この建物の前にある昔の上水しかり、裏側には下水があり、その裏にはもう一本向こう側には、農業・灌漑用水、さらに山側に防火用水があるんですね。水路がこのように並んでいて水路のまちでもあるんですね。

一同：なるほど。

この川沿いの家は、全て川をベースに生活をしていた。例えば、私が一応食べた後は川で洗っていた。御櫃を洗っていたら魚が寄ってきて魚をどけながら洗ったりしていた。洗濯もそう。だいたい何でも川でやっていたから、ここでみんなが集まってしゃべるわけです。だから、ここは井戸端会議ではなく、川端会議。だからいつも川と付き合っていたという感じ。

千曲川は、幅が一キロ？あると聞いてびっくりしたんですけども。とにかくこの川というのは生活の一部。小学生の頃はもう学校から帰ってきたらすぐランドセルを放り投げて、夏は川に直行と。みんなで川に入って魚とって、泳いだり、筏をつくって遊んだり。入って魚採って泳げたりしていつも川に接していると。

大津山：なるほど。でも、その川との距離を変わずに保ち続けるってことが難しい。最近は川に「危ない」「危険」、「川で遊ぶな」という看板が、いろんな事故があったり災害があったりして、沢山やっぱ掲げられている場所も多いわけで。それでも、川との距離を守っているというのは、地域みんなでその距離を守っている、ということですかね。

春名：もちろん変わってきていることもある。今はね、あの、「鵜」ね。鳥の。私の子どもの頃は鵜っていなかった。昔は岐阜で初めてみたくらい。でも、今いるのが大鷲までいる。鵜と大鷲がとにかく沢山増えている。それはつまり魚を食べに来ている。水が綺麗で、魚を捕まえやすい。鵜は川の真ん中で魚を取り、白鷺は川の岸川で魚を捕まえている。昔はそういうのがいなかった。人が魚を採らなくなって、鳥が食べるので、今は魚を見つけるのは大変。鵜は一日に自分の体重くらい魚を食べるので。しかも高級魚から食べていく。

一同：笑い グルメなんですね。

春名：あと平福の見どころは、この川端をうまく利用して自然の地形を活かして川端に石垣をたててそこに家を建てている。ということは、この川風が吹き、夏は大変有難いんですよね。夏は扇風機とかエアコンがない時代でも、この川風を利用して、いい風を取り入れていたということもある。

大津山：まさに暮らしの一部ということですね

春名：平福の特徴は、間口が狭くで、街道から川までが一間の敷地になっている訳です。街道に面して母屋があり、川のほうに向かって中庭、蔵、川座敷へと続く。この中庭を作るのは京町屋と同じで、全部を屋根で囲ってしまったら、光や風が入らないということもありまして。家の中でいいところは川座敷で重要な部屋になる。お客さんをおもてなすときも、そこを使う。川座敷が最も快適な空間になっている。昔からそのように川（風）を家の中にも利用している。

大津山：やっぱり川の利点というか、川のメリットを日々の暮らしの中で十分に受けているからこそ、川の近くで生きていくということになるわけですね。

春名：平福は歩いて二千歩で、南の端から北の端まで行ける。だから約 1.2 キロのコンパクトシティのようなもの。この川の幅長さも 1.2 キロぐらい。私はもう子どもの頃から 1.2 キロの川を端から端まで全部知ってまして、どこに来たらどんな魚がいるか、深みも知り尽くしていた。

大津山：だからこそそこが危険かもわかっていた、ということですね。

春名：だから私の二倍ぐらいの身長ぐらいの深いところもあったし。そこにはどういう魚がいるかもよく分かっていた。ただ、今回の水害（台風 9 号）があつてからは、まず二度と水害が起きないように、ということで、河川改修工事で放水路に近くなったんです。だから、味気なくなった、というのはありますね。深みも何もなくなり、一定に統一されたので。終わった時には、これは前の川ではなくなってしまったな、というのはありますね。ただ、時が経つ中で、昔の川の雰囲気に戻りつつあるようなところもあるんですけどね。

あとは、日にちは集落によって違うんですけども、川掃除というのがあって、集落の住民全員で川をきれいにする、という行事もある。川をみんなで綺麗にする、大事にするってことは重要なことかと思えます。

外国でも、川を綺麗にしよう、という運動をして観光客が増えたという事例もあるみたいですし。常に川というのは、人と常に生きてるということですね。

大津山：春名さんの「川を大事にする」というお言葉が、川と一緒に暮らし、綺麗に掃除もして、利点も欠点も抱えながら、共に生きていく、ということを表しているような気がいたしました。有難うございます。

では、関さんお願いします。

関：こんちゃん農園の黒田さんのお話で、補助金の話が出ました。この補助金を申請されて、いろいろ勉強されて、補助金をとったりされた。その上で、申請の枠が無いものはこっちから提案していく、という。今まで、「こういう助成金ある」ということに対して、完全に受け身になっていて、市からの募集があるものを待ってというのが当然の考えでいたんですけど。もし無いものであれば、こちらから逆提案しちゃえ！という精神ですかね・ないものであればこっちから提案していく、その姿勢ですね。

大津山：黒田さんのお話、面白かったですよね。無いものを作り出す、というか作り出させる！という。あの姿勢ですよね。歴史的背景を含め、今までの実例や教訓も含めてご共有いただいて、本当に良かったですよね。

小川：豊岡の街並みですね。それをうまく使って交流人口を増やそうとしている点ですね。あとは、大豊岡構想として、あの時代に洒落たロータリーを作ったりとか。そういう遊び心って言っちゃあれですけど、そういうものも入れながら、構想していったところがすごく印象に残りました。特に、その後 RC 造の建物が連なった町並みが地区の人以上に、地区外の人に人気がある、ということ。やっぱり自分たちでは気が付かないような魅力を地区の外の人が見出してくれる、という。その辺の印象が残りました。

大津山：この点は、まさに災害後のまちづくり、というより都市計画で、災害前より安全に、そしてより素敵になる、という災害を機とした新しいまちづくりとして約 100 年前にそういうことに被災後に日本全体が考えていた、ということやはりすごいことですよね。これは都市全体のこととは思いますが、小さい規模でも、丹波市でご覧になったように、住民同士の小さな規模でそういう土地を提供したりとか、小さな規模でもできますし、大豊岡構想のような新しい時代をつくる、というような「災害を機とした新しいまちづくり」の観点かと思います。ありがとうございます。他にも多分あると思いますが、どうでしょう？

関：佐用町の春名さん。

一同：笑

大津山：やっぱりそういう人がいるっていうのは最大のポイントですよね。

関：印象に残っているのは、他の人ができないことを、「やってやろうじゃないか」と。例えばこの建物も多分残そうなんて考えた人はそんな考えも全くつかないような状況だったし、壊して当たり前でしょ、というようなところを「やってやろうじゃないか」精神でやって見せるという。やってやろうじゃないかって思いの強い人のところに人が集まるのかな、と思いましたけどどうでしょうか。

春名：一人だけの力というか弱いんですけど、思いを伝えていけばどんどん増えていくんですよ。この前の KUMOTSUKI の草刈りもすごかったんですよ。森というか林のような状況で。最初は一人だったんですが、すぐに草が生えていくわけで。少しずつ一緒にやってくれる人が増えていったわけです。草が堆積していくので、逆に土が肥えて、ここに花を植えたら、どこの家の庭に植えるよりも咲くんじゃないかと。

それと、平福には街道沿いの両側に家があるが、特に西側の街並みというか、すぐこの町並みの 500 メーターいかないところに、国道ができました。昔はこの街道が産業通りとなっていた。ここがかつては渋滞だった。祭りなどの時には、神輿もある、屋台も 4 台、獅子舞もある、ということで、トラックやバスが出なくなるという事態が発生するわけです。

それで、通せ！となって最後は「お花」を出しましょうか、という感じでね。それもコミュニケーションの場かもしれないけども。でもどうしようもないので、トラックもバスも大型化していますので、10 トン車などでは街道では狭くて瓦を壊すようなこともあって、今はバイパス 373 号線がついたと。今は、全部バイパスに行くようになったので、ここの道路は生活道路の部分として使っているわけです。

あとは、街道の西側の一軒でも家が欠けるだけでも、川から見た時にトラックでバスが通っている様子が見えてしまうわけです。せっかく江戸時代の雰囲気以案内しているのに、そんな景色が見えてしまうのはよくないので、この家一軒でもなくなってしまうたら、違和感が出てしまうわけです。だからやっぱりこの西側は一軒も欠けてはいけないんですよ。そういうようなことで、管理がありますが家の取り壊しはせずに活用していく、というのはこれからも守っていかないとけない訳です。

この平福はわずか 1.2 キロのまちなので、車で通ったら何も気がつかないまちでもあるわけですよ。車だと、「そんなまちあったっけ？」「え、何もなかったよ」、と言われる。自転車でさえも速すぎるようなまちなんですね。だから、みんなには歩いて欲しい。歩いてください、ということです。



最終ワークショップ写真 3：佐用町の春名氏からはワークショップでもご助言をいただいた

大津山：歩かないとわからない魅力というのは、そこには春名さんのようなガイドさんがちゃんとして、まちの魅力を案内する人がいる、ということも大切なことですよね。

春名：ただね、ガイドも高齢化している、という課題がありましてね。あたらしい時代の新人ガイドを勧誘するのをどうするかを考えているんです。これは別に平福地区以外の方でもできると思うんですよ。いろんな資料とかマニュアルを作成してね。特に利神城については歴史のことを理解しておく必要がありますのでね。いろいろそういう説明が入ってくるのでそういう歴史用のマニュアルも作ったり、その試験問題とかを作ったりしてね。実は利神城検定というのがあるんですけども、百問あって 25 分で解いて 90 点以上であれば合格となっている。

一同：厳しい～

春名：厳しいかもしれませんがね。ガイドですから。歴史は西暦だけではなくて、和暦と共に説明することで非常に重みが出てくるので、覚えてもらうという。ま、そういうようなことを、テキストの方で勉強してもらっています。

岩崎：うちもガイドできるよっていう人はいますね。笹井さんとか。

小川：長沼検定ってものもありますね。

大津山：まちの魅力を伝えていくための後継者を育てつつ、まちのガイドできる人を増やしていくことは重要ですよ。

春名：内外でガイドを増やしていくことは重要ですよ。

大津山：まさにまちのファンを増やす取り組みですね。

春名：ここには京都の方も定期的に来られるんですよ。京都って素晴らしいとこじゃないですか？こちらから見れば、京都は素晴らしいし、神戸のほうがいいでしょう、と話をします。すると「いや私はこっちのほうが落ち着く」と言っておられる。やっぱりこのまちの魅力というのは、何もないというか、店もそんなにないことでもあるわけです。

この平福の観光まちづくりの方針として、「観光地化しない観光地」ということで、自然に「皆さんが歩きたくなるようなまち」。それが元々の発想。だから、ガチャガチャしていないし、いかにも観光客目当てに大きな看板があるわけでもない。暖簾がさりげなくあって、「ここが店ですよ」、と表しているくらい。

大津山：なるほど。それは、きっと暮らしている方々の元々の静かな暮らしを大切に守り、それを見せられているわけですよ。暮らしている方々が幸せになる空間をつくっているということですね。京都では、観光客のために「見せるため」にいろいろ整備してしまって、住んでいる人は住みにくくなる「誰のためのまちなんや」と住民の方々が口にしてることを聞いていますし、今でも大きな課題となっていると思うので、そのあたりの課題を佐用町は、きっと調和を図って「みんなの幸せ」を大切にしているわけですね。

春名：犬の散歩もね。他のまちの人が軽トラでわざわざ犬を連れてきてね、この川の遊歩道で散歩したりとかね。

大津山：そういう犬を含めてみんなを受け入れるような空間、いいですね。やっぱりこれはいろんな人が往来する街道としての誇りというか文化が残っているのかな、と感じますが。

春名：実はね、2025年に万博があるということで、斎藤知事（兵庫県）が兵庫県で6か所スポットを選び、動画を撮ってヨーロッパで紹介すると。去年の12月に9月から12月にかけて撮影していました。そのうちの一つに平福が入っているんです。外国人のモデルさんと一緒にまちあるきをしながら、利神山に登るようなことも撮影してヨーロッパで紹介し兵庫県に来てもらおうとね。

大津山：やはり美味しい食べ物と美しい景色は、人を魅了しますね。ちょっと話が横にずれましたが、質問に戻りましょう。小川委員長いかがでしょう。

小川：まあ、これはちょっと当たり前かもしれないですけど。ぽんぽ好のみなさんがおっしゃっていた中で、やっぱりあの経済的に収支の面で「持ち出しはしない！」という方針を立てていたことが印象的でした。「こんちゃん農園」と連携して、近所で作っていただいている地産品を活かして、お弁当を作っておられる、ということが非常に印象に残っています。持ち出しはしない、これを実現している姿ですね。

大津山：なるほど。だからこそ、儲ける仕組みというか、資金・お金を回す、「循環」って言葉を使っておられたと思います。そういう循環していく仕組みを作り出すというのが、やっぱり持続するには必要になってきますよね。春名さんも、やっぱりガイドの時もきちっとお金を徴収されているわけで、それによってガイドが増えるし、持続するわけですよね。

春名：それによってみんなが、続くということですね。結局、やっぱりお金のない活動ってどこかで頓挫するわけですから。やっぱり跡継ぎをつくっていくためにはそれなりの資金をつくっていく必要はあります。最低限の件費やら、運営にかかる費用などですよね。

例えば、昨日着ていた私の法被なども、そのガイド資金で作ったわけですよ。平福の呉服屋さんを通じて、京都の染屋でやってもらった。平福の法被だと気分が大きく違うわけです。

大津山：さきほどのおっしゃっていた資金の話につながって、持ち出しはしないという話は、今回の視察のテーマの一つであるファンドレイジングの一つにも大きく関わる事項かと思います。だからこそ、丹波や春名さんの事例のように、まちの魅力を発信することでファンを増やし、お金を増やし、維持し継承していく、という循環の仕組みが見えてきたのではないかと思います。

春名：だから、ついこの前 9 月 8 日なんですけども、山城ガイド協会で作成したんです。贈呈式がちょうどありましてね、佐用町のエキスプレス？ そうそう、プレスルームでおこなったんですけどね。小さなことからコツコツとね。山城というのは兵庫県の西播磨県民局が 11 個の山城にガイドを置くとして、3 年間の取り組みでやったわけです。大きな文化会館で集まって、専門の講師やコーディネーターに教えてもらったりしながらね。今度は山城スタンプラリーというのをやりまして、今年の 9 月から来年の 2 月まで実施する予定です。上月城などの城があるのでね。

大津山：まち全体の中に回遊性を持たせてファンを作っていくという、エリア全体の取り組みであらゆる機会を捉えていくわけですね。

春名：ここには全国からいろんな人が来ます。大型バスで一気に入り場所から事前に連絡があって来るとありますが、個人だとわからない。九州から青森などいろいろ。どこからくるかわからないんですね。

一応、台風とか警報が出ればガイドは中止とかにはなっているのですが、遠いところからだと、急に「今日は中止」となっても帰ってもらうわけにもいかず。せっかく来てもらっているのに、山城の魅力を感じてもらって帰って頂く最大の努力をしています。いまはガイドは半年待ち、という状況になっている状況です。というのも、地域を守る、山を守る、命を守るという観点から、一日 20 人に限定している訳です。雨の時に人が入ったり、するとそこが荒れてしまますね。で、どんどん荒れた取り組んだ後に、今度は根っこから倒れて、山に穴が開いてしまうんですね。

大津山：なるほど。では、最後に小川委員長、もう一つ付箋をお持ちですね？

小川：景観形成事業。ちょうどさきほど春名さんがお話いただいたようなことかと思いますが。

大津山：有難うございます。具体的なワードとして景観形成という言葉は出ていなかったの、歴史資源の活用というところに合わせてまずは貼っておきますね。

皆様ありがとうございます。皆さんからの「印象に残ったこと」ということで、お話いただきましたないようはこちらです。では続いて、ここから後半に入ります。

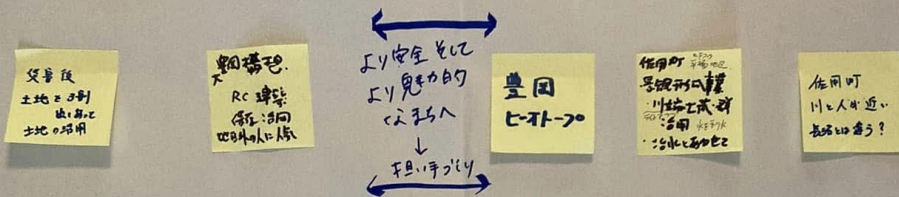
印象に残っていること

2023.9.12
@ Sayo, Hirogo

長沼地区住民自治協議会
まちづくり委員会 代表メンバー

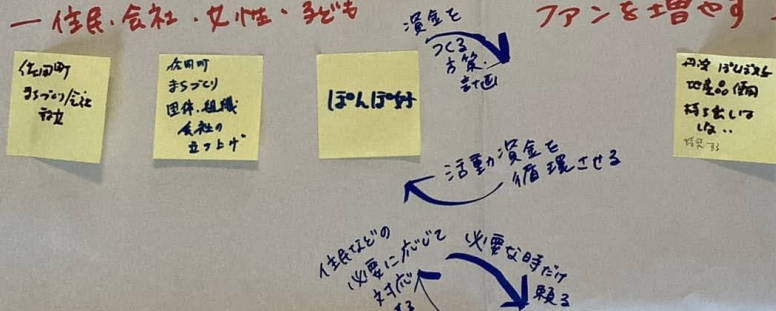
被災 → よりよいまちをつくる！
姿勢・取組み

川・水はニわけても、
その「木」を活かす



まちづくりの多様な主体
— 住民・会社・女性・子ども

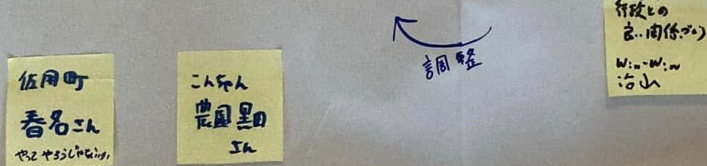
持続可能な資金調達
ファンを増やす取組み



不可能を可能にする
リ-ター- (change agent) の存在

行政との「良い」関係性

人によし、まちによし、
行政によし、の
三方よし



最終ワークショップ写真 4: 「印象に残っていること」のまとめ

3) 視察を踏まえて、これから長沼で実施あるいは検討していきたいこと

大津山：こちら（模造紙）が、Yチャートと言われるものです。

これからは、ヒト・モノ・カネについて、今回の視察を踏まえて、長沼でやってみたいと感じたこと、あるいは実行するかどうかを含めて検討したいことについてお考えいただき、意見交換の時間をもっていこうと思います。

<途中雑談いろいろ>

大津山：ではそろそろ始めましょうか。学んだことを適用、となると地域の事情もあるので、難しいところもあるとは思いますが、今の案件の中でこういうところが部分的に使えるんじゃないかな、とか。一部でも構いません。

では、ヒト・モノ・カネの内、モノには場所やツールも入ります。ヒトは運営する人、実施する人、引き継ぐ人、やってくる外の人もあります。カネは助成金もあるでしょうし、住自協としての割り当て金もあるでしょうし、原資としてみんなで出し合うこともあるかと思います。

では、小川委員長からお願いします。

小川：米澤邸を活用できないかと。

大津山：米澤邸の活用。では、ちょっと具体的にもう少しどういうふうを活用できたらな、と思われませんか。

小川：交流の場とかだけでなく、カフェとかレストランという形にできるやもしれない、というような。

大津山：まちの人たちの中の交流の拠点という意味だけではなく、そこから資金をも作り出していけるような場所になるのではないかと、ということですね。では、その「あったらいいな」のために、今どういうことが不足している、あるいは懸念と思われませんか？

小川：やっぱり周りの住民の理解です。住民の理解・意識ですかね。その価値観とか思いとか。人それぞれとは思いつつも。

大津山：例えば、住民の理解が難しい。佐用町のような具体的な事例を見ることで、活用することによって、まちの皆さんにとって利益があるんだ、という共通の認識がつけられれば、もしかしたら皆さんも協力してくれるかもしれないって希望はあるかも、ですかね。他にはどうでしょう。

関：私も、米澤邸です。どうなるのかわかんないけど、その活用には（佐用町ではノットが入ったように）協力会社・団体を入れるかいいないかっていうところ。やっぱり入れればいいものができるかもしれないけども。どういう方を呼んだらいいのか、その前にまず住民の理解が得られているのか、どんな風に入っていたか、などですかね。あとはお金のところで、佐用町のように市が引き受けたり買い上げたりして、運営会社に別途お願いしていくようなやり方ですよ。その場合、市が補助金などを出していくという方向とか、クラウドファンディングとかも。今集められていますけど、もう少し集まる方法はないのかな、と。

大津山：まずは活用できるように整備が必要とは思いますが、どう使うのか、実施・運営の主体が誰なのか、という点がはっきりしないとお金を集めても難しいところがありますよね。今の課題の一つとしてはそういう用途や主体が明確ではないことが先ほどの住民の方々の理解の課題として挙げられるかもしれないですね。その点も是非付箋に書いていただいてもいいですかね？

岩崎：私も同じく米澤邸で、やっぱりそのお金と誰が運営するかを管理するかっていうのは、切り離すことができない問題だと思うんです。あの場所を活かしたい、と思っても、どこが管理・運用すればいいのかを考えていくと、この佐用町のようにまちづくり会社みたいなものを立ち上げるか、観光協会的な組織があるべきなのかなと。あれば、事が進んでいくのかなと、思いました。

もう一つモノのついでに言うと、長沼地区は水害のあと公費解体をどんどんしてしまったので、我先にっ感じて。当時はやっぱり先のことをそんなに考える余裕もなかったから、今となっては仕方のないことなんですけども、やはり歴史的価値のある建物を、佐用町の様に川端土蔵群ではないですけども、遺していくとまちの資源として使えたのかな、とは思います。

大津山：そうですね。たればに過ぎないかもしれませんが、水害の前に、長沼地区にとってここは重要な建造物だ/街並みだ、という認識をしておく、示しておくということがあれば、もしかすると解体はある程度防ぐことができたかもしれないですね。

岩崎：そこでも当然お金の問題が出てくると思うんですよ。そこは長野市に買い取ってもらって、たとえば改修してもらって、管理は住民で考えるなど。会社をまちで立ち上げるとかですよ。今更ですけど。

大津山：まだ残っているものもあるわけですし。きっとまだ遅すぎることはないと思いますけどね。

岩崎：米澤邸に関しては残っているわけですから、ちょっとこう活用できるものがあるってことはそうですね。あるにはあるんですよ。

大津山：その活用についてみんなで考えていくことが必要、ということですね。その中でどう運営していくのかは、佐用町の会社をまちで立ち上げるっていうのはヒントになりましたよね。きっと。

岩崎：それは感動しました。

春名：もう一つ佐用町には実は組織がありましてね、「平福文化と観光の会」というものなんですよ。

大津山：ですよね。そちらもリーダーは春名さんでしたよね。

春名：そう。平福の瓜生原邸という、江戸時代の享保 5 年に建てられた川端の建造物は、その運営を文化と観光の会で受けてまして、そこで文化と観光に関連させて何をしようかと考えています。手打ちそばをやってるんですけどね。その平福文化と観光の会の会員で運営しているわけです。そこにはそば打ち職人がいて、その主だった人がやっているんですけどね。こういう地域の団体と、商工会から派生した会社のほうと二つの運営主体が平福にはあるんですよ。もう 40 年くらいになりますけどね。

大津山：平福にはそういうみんなで管理、というか多様な主体が管理・運営するというのが一つの手法として醸成というか形成されてきた、というのはありますよね。

春名：みんなが関心をもつ、ということがまずできていたので。

小川：それは歴史研修の会のようなの？

春名：歴史研究会は別にあるんです。歴史を学ぶよりも、それを観光に活かしていくというような。

小川：観光の会、そこに観光という言葉が入っているわけで、そこが違いなんですね。

春名：一人千円でまちの住民全員が会員となってもらっている。その資金を基に、希望する会員は年に一回研修旅行もしている。この研修もして学びながら、平福の賑わいをもたらす活動をするというね。

例えば、別のところで「暖簾のまち」として打ち出しているまちがある。そこでは各世帯で暖簾をかけて色とりどりで魅力的なまちをつくらうとしていたもの。ただ、手染めなので、3-4 年で風化して使えなくなってしまうということが課題としてあるわけです。

そこで、平福は屋号のまちにしてはどうか、と。そこで、各世帯の表札とは別にもう一つ屋号を掲げることにして、檜の木を使って屋号を掲げると。100 年でも 200 年度も色あせたりしないので。20 年経

てばそれなりの味わいが出てくるわけで。30 年経ってもそう。お金のかからず永久保存ができて、そこで魅力を出そうと。

関：長沼では、長沼城の傍にあった櫓の木を伐採したんですよ。その櫓の木が太くていいもので、その木が保存されていて、今後活用していこうという方向になっている。屋号という方向もいいな、と。

春名：それは屋号ですねえ。

関：そこまで調べられるかどうか分からないけど。

大津山：ただ屋号があるところとない家庭がありますよね、きっと。

小川：りんごの木箱に屋号が焼き印でありますよね。うちなんかは、マルヨっていうもので。

関：それを全員探してもらうとか？

岩崎：それ面白いよね。

春名：屋号を探したのは明治 35 年の史料だったんですよ。昔番頭さんが中火鉢のところで記載して集めていたようなものとか。120 軒くらい出てきた。家にも残っているものもあって。家の人が出してもいいよ、という許可をもらったところだけ屋号を掲げているんですよ。

大津山：平福というか春名さんのお話を伺って、他のまちを積極的に見に行って、そこで課題を見出して、じゃあうちのまちでどうしようか、ということを転換して自分のまちに適用するという力がすごいな、と感じますね。

春名：そうですね。周りを見て学んでね。常にうちではどうするか、考えています。

大津山：では次にいきましょうか。

関：川育です。

大津山：なるほど、人を育てるってことですよ。

関：長沼には防災ステーションっていう巨大な防災の施設ができるんです。そこで、川との距離を考えたり、触れ合ったりするようなことを子どもや住民と考えて、行政とお金を生み出していくということも

重要かなと。

大津山：豊岡の資料の部分をご覧頂きたいのですが。豊岡では当時の市長が大きく打ち出したのですが、「命のまち」の概念は、実は、豊岡は「命の教育」の提唱者がいた、という歴史を引き継いだものなんです。自分の命が大切、だから相手の命も大切にしよう、というのがメッセージ。それはコウノトリの命もそう、その命をつなぐ虫の命もそうだし、というところにつながっていくんです。

岩崎：なるほど、ここでコウノトリにもつながるんですか。

小川：素晴らしいよね。

大津山：それが根底にあってつながっていくので、教育とまちづくりと一緒に進めていかないと、結局のところ目指したいまちの実現に必要な担い手が育っていかないわけですよ。豊岡の地震後の大構想もそうなんですけど、あの壮大な計画を受け入れて、さらにそれを実施していった、という豊岡の背景には、豊岡には元から藩校があったこと、そこには新渡戸稲造がおり、赤井さんという土木の偉人が生まれた教育的な背景があって、今の豊岡につながっていくわけですから、さきほど関さんがご提案された川育という提案はすごく重要なことではないかと感じますね。

春名：ちょっと質問してもいいですかね？千曲川は泳いだり、遊んだりとか、花摘みができたり、そういうことはできないんですか？

小川：いやー、今は、ほとんど無理ですね。流れの強さにもよりますが、昔のように砂利のところがないので。

岩崎：上流のほうにいけばできるんですけどね。

春名：ここはね、よく都会の方から来られて、「この川は入っていいんですか？」「どうやって入るんですか？」ってお尋ねになるんですね。川の遊び方を教えてあげたいな、と。

ここには、いろんな魚（〇〇とか、〇〇とか：名前いろいろ）がいるわけですが、それを石で堰をつかって魚が遊びにくるので下流のところ魚が逃げられないようにしてね。そこで手づかみで魚を捕まえるわけですよ。

大津山：そういう楽しさを感じる機会って大切ですね。

春名：道具がなくてもね。この川だからできるんですけどね。川幅が一キロもあつたら難しいかもしれま

せんねえ。

岩崎：「川で遊んで楽しい」ってことないもんなあ。

大津山：昨年度「さんしん」のグループで西嶋さんが川遊びできる空間を提案されていましたね。では、ちょっと時間もないので、次にいきますが、小川委員長お願いいたします。

小川：これもモノになるかもしれないですが、これから防災ステーションとして複合施設ができそのエリアが新しい形になるので、そこでの活用をどうするか、ということですね。前々から出ていることではありますけどね。

春名：（関さんに対して）設計されるんですか？

関：いやいやいやいや、うちは住宅などで、防災ステーションはめちゃくちゃ大きいものなので。国がやってくれるものです。

春名：城があったとのことなので、城をモチーフにするとかね。四角い建物だと味気ないので城っぽくするとか。

岩崎：それいいよなあ。

春名：石垣とか、城の遺構としてね。

小川：それが全く通じなくて。なかなか。

大津山：他にはどうでしょう。

小川：水に関連しては、養水を。

大津山：長沼の養水、本当にすごいですもんね。善光寺平の水利権が長沼にあるんですもんね。

春名：それは、どういうものなんですか。

小川：今は雨水排水の機能もあるんですけど、利水として江戸時代にはもうあったと言われてます。長野市を県庁の脇からずっと水を引いてながれてきた一番の下流に長沼があって。それをずっと守ってきているんです。

春名：草などの管理もされているんですか？

小川：もちろんです。昔は土を掘ったままだったので、泥さらいを含めてかなり管理が大変だったので、今はコンクリートで固めているので、草刈りとかですけどね。その管理として養水費ということで運営費を納めてもらって、作業の時には作業費としてお金ももらって管理はしているんですけどね。

春名：それは農家が支払っている？

小川：使っている農家が。

大津山：では次は岩崎さんいかがでしょうか。

岩崎：次の方に。

大津山：せっかくの発言権が。本当にいいのですね？では次の関さんにお譲りされる、ということで。

関：アップラインの直売場。これはね、資源なんですよ。あれは非常にいい資源で、なんとかあの場所を場づくりとして使えないかと。JAの直売所も当然あるんですけど、もっとみんなで気軽に使えるようなことができないかと。今はりんごの直売所はつぶれて使えないのであの辺を生かして何かできないかな？とは思っております。

大津山：なるほど。例えばどんなことができそうだなーと思われませんか？

関：いろんな若者が集まる場所ですね。飲める場所もそうだし笑、シェアオフィスやワーケーションの拠点、ノマドが使える、あるいはカフェなども。

大津山：なるほど住民の方々も、国道の通りすがりの人も入れたり、楽しめたりするような？

関：そうです。国道沿いなので、いろんな人が気付けるし、来られるし。これからの後継者が続いて、いろいろできるような。

大津山：まちガイドなど、まちのほうに誘導する案内の拠点にも活用できるわけですよね。

関：ただ、今はそんな資源があるなということだけけど、どう動いていけばいいのか良く分からないんですよね。

春名：ここの隣の鳥取県なんですけどね、その観光案内所の二階がまさにそんな施設になっていますね。誰でもわずかなお金を払えば、Wi-Fi を使えて、ネットができてそこではコーヒーも飲めるようになっていますよ。そこは、誰でも、何人でもいいので制限もない。私も鳥取に行った時には、必ずそこに寄って休憩しています。その運営しているところの専務と知り合いなんで、いろいろ話し込んだりしているんですけどね。

大津山：鳥取のケースは会社が経営しているのですか？

春名：たしか役場が主体だったと思う、観光協会かもしれないですけどね。

関：いろいろ調べて、動いていこう、と思って、実は行政にもちょっと連絡取り合ったんですけど、ちょっといろいろ法律的な問題があると言われて。国道で本来営業できる営業行為の項目がもう決まっている、とか。自動車販売とか、もういくつか認可されている項目があるようなんです。今の国道沿いにある空き家のところが、実は建築許可を実はとってないということもありますし。でも、なんかいろいろ思いを強く持ってやっていけば、なんだかできるかもしれない気もしてきています。

大津山：それはまさに、さきほどの、これですよ「やってやろうじゃないか」の精神ですね。

春名：役場は上の人じゃないと分からないことが多いので、上の人を出してもらうのが一番話が早い。一応ね、佐用町の防災リーダーの役を任命されていたんですけどね。その時まさにそう思ったんです。

岩崎：ほんといろいろやっていますねえ。政治家さんともつながりがあったりするんですか？

春名：政治家とはあんまりつながっていないですね。もちろん、政治家のチカラを使えば簡単なことも多いかもしれないんですけど、政治家と関わってしまうとそのしがらみもあるわけで。金や時間を結局出させられることになるんです。政治だと、反対派も生まれてしまうので、結局うまく立ち回れなくなる。あくまでも、自由な身でいることを優先したい。

大津山：なるほど。直売所の課題と活用は行政にとってもメリットのある形で、提案していくようなことが必要になってくるかもしれませんがね。では、次のご意見はいかがでしょうか。

小川：ヒトの部分ですが、まちづくり会社ってどういうものか、これから調べてみたいと思いました。

岩崎：もう、私も感動しちゃったんです。もっと四方田さんにもっと話が聞きたいくらいですよ。

大津山：ほんとにそうですね。このまちづくり会社も地元の観光協会の方々がやっていることも、地域の方々にとって受け入れやすさを生み出していますよね。きっと。三人で合資会社つくって、まちづくり会社やります、ってのも、必要であればいいかもしれませんよね。

関：あの3人、視察行ってからなんか会社つくっているぞ、とか言われたりして。

大津山：笑。最終的にまちの未来につながればいいのではないかなと思うんですけどね。ここも、決して四方田さんが私腹を肥やすためにやっているわけではないことは明らかですから。

岩崎：でも、このまちづくり会社をつくるっていう発想をもらったんで。いろいろ検討していくことですよ。

小川：他には寺や神社の活用ですかね。

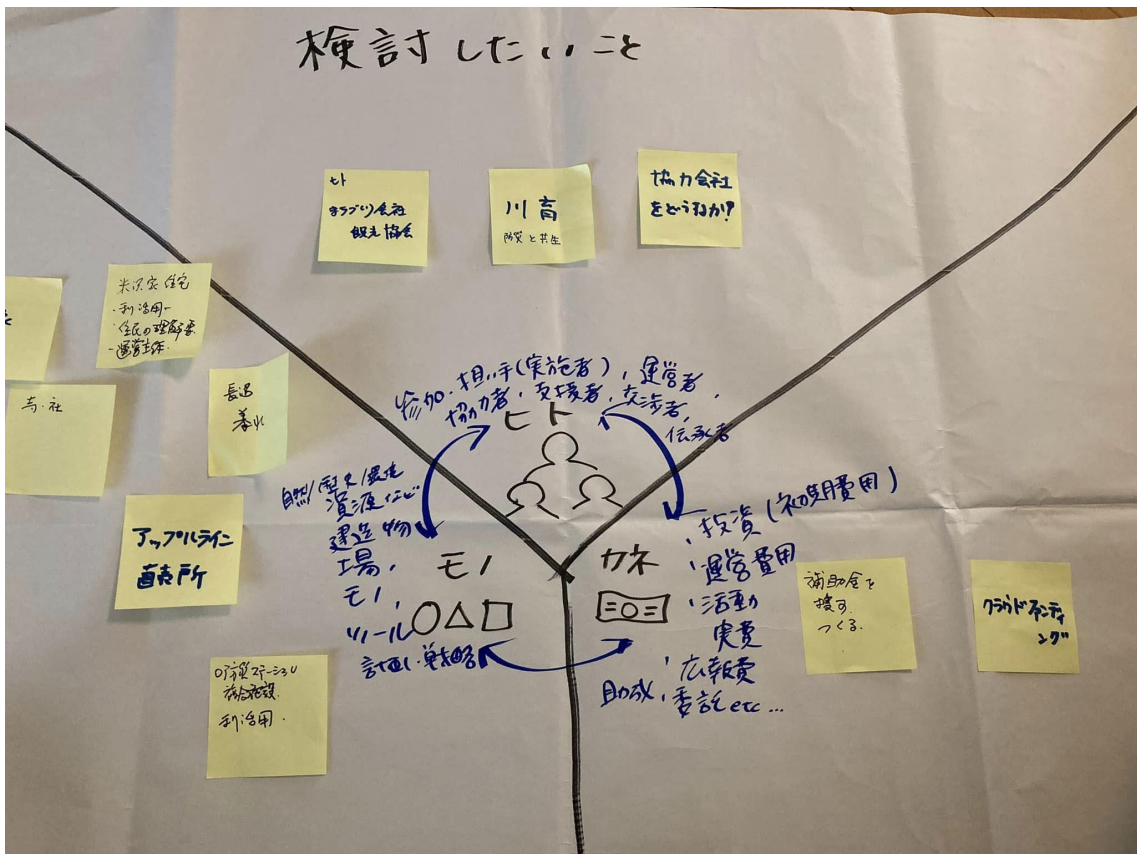
大津山：より魅力発信していくような感じですね。有難うございます。

では、今のところ、モノのところでは、米澤家住宅の利活用、アップルライン沿いの直売所、防災ステーションの施設の活用、長沼養水、寺や神社が出ていましたね。

Y チャートを見てみると。まずヒトの部分から。これは、モノの利活用にもつながるとは思いますが、まずは何をすることも住民の理解が必要だということ。そして、次に運営主体は誰か、ということになりますが、まちづくり会社あるいは観光協会などの新しい主体・組織、そのための体制などの話も出ていました。それに関し、外部の協力会社の話もでしたが、どの部分でどのように関わっていくか、目的に向かう見通しというロードマップのようなものの検討が必要だ、という話もでした。あとは、これからのまちづくり長沼地区と並行して走る、千曲川とどう生きていくのか、そこで暮らすまちの人たちの、「人づくり」として川育についても考えていく必要性についても話ができました。

さらにカネのところでは、現在進行中のクラウドファンディングの話ができました。米澤邸の修復に向けてどうしたら支援者を増やしていけるのかということで、それについては、まずは利活用の目的を住民間で考え明確にすること、そしてその利活用にあたる運営主体を考えていくことが前提となるということも話し合われました。

ではここまで整理した段階で、最後に講評ということで、上田先生をお願いします。

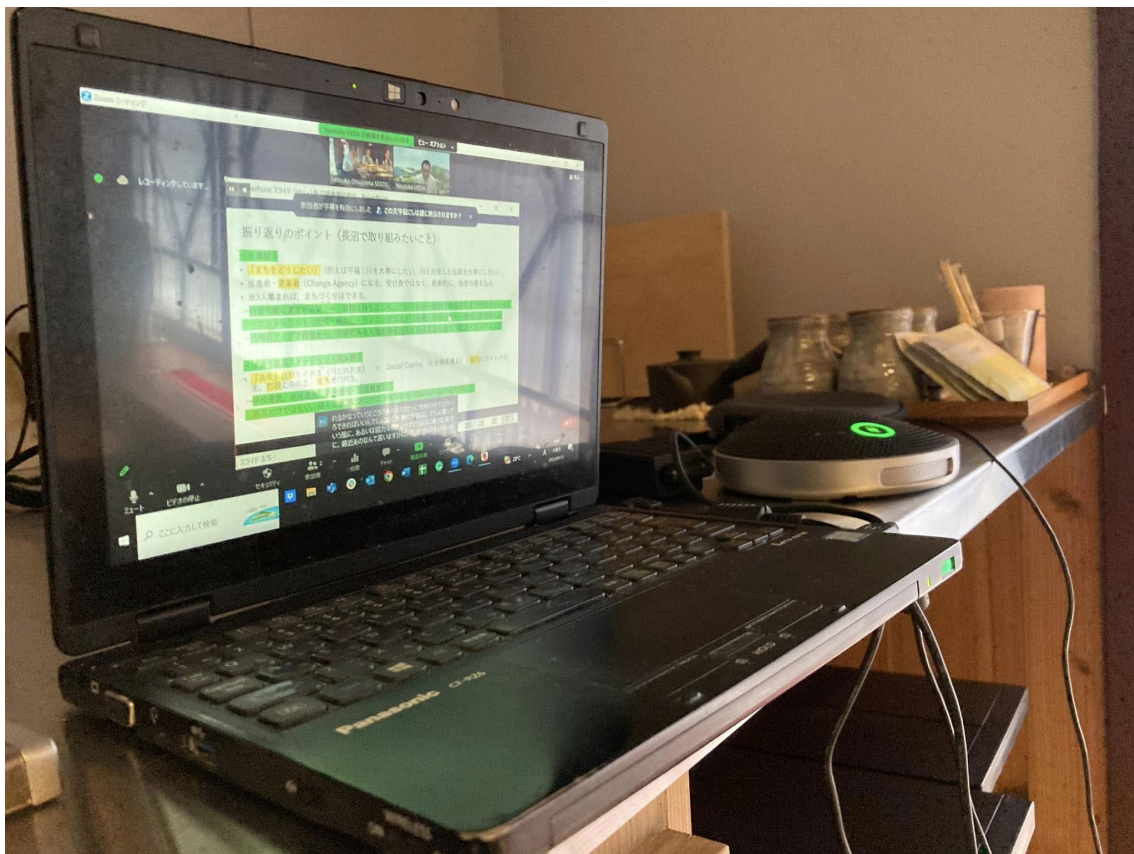


最終ワークショップ写真 5 : ヒト・モノ・カネの「検討したいこと」

4) 講評

上田：はい。もう、皆さん大事なポイントはめちゃめちゃ出ているのかなって思っています。

これは振り返りみたいなもので、皆さんおっしゃっていたことをちょっとこれキーワードになるかな、キーポイントになるかなっていうのを抜き出したものですけどこの画面って見ることでできますか。



最終ワークショップ写真 6 : ファンドレイジングの専門家として上田先生より講評を頂いた

小川さんと関さんはオンラインで既に私のお話を一度聞いてくださっているのですが、ちょっとそういったところも踏まえてなんですが、第一に、冒頭で書いてある「まちをどうしたいか」というイメージを共通して持つことです。これからどういう風にしたいかっていうところの根本のものですよね。で、それは、平福の話を伺っていて、平福がものすごくそのイメージができています。例えば川を大事にしたいと、川を川と共生してきた伝統を大事にしたいとか、それが根本にあって、いろいろな活動につながっているわけです。

そのための活動で、お金が必要で、どの人を呼んで、ということで発展しているということですね。後でお話ししようと思ったんですけど今ここで直結させると、米澤邸が資源であり、利活用できるのはっていうところの意見として出ていたと思いますが、どういうまちをつくりたいのか、そしてその地域の想いとしてどういう風を集めるとか。そこと繋がっていくんだと思うんですね。やっぱりそこをもう一回ちゃんと立ち

かえて、検討するところが大事なのかなってということですね。

次の共生のところですが、これは、自然との共生っていうところと、人との共生。人と言ってもいろいろなカテゴリーがあって、域内もあれば、域外いわゆるその地域の外の人との共生。それと、行政との行政で、組織外との共生、その「ともに生きる」っていうところ、これは自然もそうですし人もそうですが、今後キーワードになるのかなと感じます。専門用語でいうところのソーシャルキャピタルと書いています。それが二つ目。

では、そういったものを強い思いをもって、どうやってその地域社会を作っていくのか。ここに「変革者 (Change Agent)」って書きましたが、この言葉は最近の教育業界の中で、重要なキーワードにもなっているものです。

これは、地域をどういう風によりよくなっていくのかってところで、進んで変革をできる能力がある人たちのことです。そういう方々に各地の視察で出会ってきたかと思いますが、小さなことでもよいわけで、「つくっていく」ということです。今回お越しになった三人の皆さんには、この変革者となっていくことを期待しているところです。私は、昔まちづくり会社にいた時によく言われていたことでしたが、まちづくりについては、全員じゃなくても三人が集まればまちづくりができると、推進する 3 人がいれば、いろんなことができていく、ということです。

次のキーワードは「多様性」ですね。

女性を巻き込みましょう。って話がでていました。あと、若者はどうなんだろうっていうのは、ちょっと話が聞こえなかったこともあってあまり例が出てきてなかったのですが、そういう多様な人たちを巻き込みましょう、ということ。私は今新潟ですが、新潟の方でももう外国人も巻き込んでいけるようなことを考えないとなかなかまちが存続しにくいとか、発展しにくいという問題を抱えているので、むしろ外国人も入ってもらって新しい刺激をもらい、新しく変わっていかないと存続できない、という議論や意識が生まれています。そうすることで、新たな形で魅力が付ける、或いは生まれてくる可能性がある。

その魅力については、既に話がでていたと思いますが、外からの気づきを聞く・取り入れることが大事で、外からの気づきを入れるといわゆる結局外の人が「来たい」と思うまちになるわけです。そういうニーズに応えることで、外部の方を呼び込むことにつながるっていう、いわゆる交流人口、場合によっては移住者の増加が見込めるわけですね。この交流人口だとか関係人口だとかは既に長沼の方でもきつと話がでていると思いますし、兵庫県の各地でも、その増加に向けていろんな事例を多分ご覧になったのではないかと思います。

それから次には行政との連携ですね。

話にもでていた「補助金・助成金がないなら作る」という発想というのは、言い方を変えれば「行政とと

もにまちを良くしていく」という発想ですよ。こういう地域活動って、よくその役所にもっとこういうことを！と要求しても、役所ができていない！みたいな批判とかになりがちなんです。もちろん、それはそれで一部の側面としてあるのかもしれないけれども、そうではなくて住民も行政も共に役割があるってことです。共にどういう風にできることを進めていくのかっていうところを、お互いにもっと検討していくっていうところが、結局はより良いまちをつくっていくっていう。それは他のまちの復興の事例を見ているとやっぱりそうでしたね。そこの共に役割をもってまちをつくっていくというポイントも、今日の話合いの中で充分にお話に出ていたかと思います。これは、その行政に限らずで、地域の中でも委員会のメンバーとそうではないメンバーなどもそうだと思います。

その次に、その地域のところにお金を呼び込むだとか、人を呼び込むっていうのは、この地域をどうしたいんだとか、良くしたい、とかっていうところに対しての理解を周囲に求めて、そこに対して協力をしてもらう支援をもらうっていうことです。それって、いわゆる「共創」ですよ。この支援的なものを得るっていうのも「共創」だっていうふうに捉えると、そういう支援者をあまりいい言葉じゃないかもですけど「ドナーエデュケーション」と言って支援者を教育する、支援者に啓発するという方が正しいのかもしれないんですけど、なんか、そういうようなところもすごく大事になってきているっていうふうにも、今よく言われています。つまり、結局お金を出す方も、何のためにお金を出すかっていう風に考えた時に、自分がやっぱり困っている人を助けたいと。で、それが自分自身の自己実現になっていく。で、それを正しく行うっていうところが大事になっていて、その支援する側にも結局どこにお金を出したかっていうところへの責任もあるんじゃないかっていうことを言われ始めているんですね。

で、そういう意味で言えば、支援してくださる方、お金を提供してくださる方に対して、もちろん使う方も責任があってその責任を共有するということでもあります。そういうことがお金を提供してくださる方だけではなくて、提供して下さる可能性のある方、潜在層っていいですけど、そういうような方に対しても、行っていくことで、市場を作っていくようなイメージです。

その対象の一つが行政であり、行政の結局お金も市民のお金で、だから性質としては似たようなものですよ。

もうすでにそうしたことを実践されていらっしゃる方の事例をご覧になったということで、その気づきにつながったのかなっていう風にすごく拝見しました。さらに突っ込んだことを言ってしまうんですが、「いかにしてみんなが幸せになれるか」っていうことなんですよ。あの、どうしたら皆が地域の方々も外の方々も、幸せになるかっていうことで、それぞれ当然理解があって意見も違ってるところはあるんですけど、それでも共に幸せを分かち合えるような活動って何なんだ？っていうところを突き詰めて考えていた時に、お互いの目指すものをすり合わせて、助け合いにつながり、支援の輪を広げて、その支援を受ける側も支援を出す側も幸せになれる、幸福感が得られるっていうことが非常に大事になってくるわけですよ。

最近はそれをウェルビーイングって言いますが、一言でいうと、みんなが幸せになるってことを追求していくようなことで、我々の業界っていいのか専門家だとかそういうところで議論されている内容になっています。

そこで、それをうまくやるところにファンドレイジングって前回お話をした内容がくっついてきます。限りある資金をみんなが幸せになるようにうまく活用して、地域・人々に還元し、そこでファンを増やして、さらに資金獲得につなげていくという循環をつくりだしていく、ということです。

ということで、皆さんの「印象に残ったこと」についての講評として非常に難しい話をあの盛り込みましたけど、でもこれは皆さんが発表されていた「印象に残ったところ」の内容を別の言葉で説明したのもあります。皆さんが今回視察によって気が付いたことは、こういうまちづくりの業界の中で先進的に話されている内容にもつながっているんだっていうことを紹介したくてお話をしました。

振り返りのポイント（印象に残ったこと）

- 「まちをどうしたい」（例えば平福：川を大事にしたい、川と共生した伝統を大事にしたい）。
- 「共生」自然との共生（川との共生） + Social Capital（社会関係資本）：域内の方々との共生、行政との共生、域外との共生。
- 推進者・変革者（Change Agency）になる。受け身ではなく、能動的に。他者の巻き込み。
- ※3人集まれば、まちづくりはできる。
- 多様性（Diversity）→受容。女性の巻き込み。外国人も？。若者は？

- 魅力の再発見。内発的だけでなく、外からの気づき。→外部の方の呼び込みにつながる。
- 行政連携→受け身ではなく、共につくる。
- ドナーエデュケーション（資金提供者に理解をしてもらい支援を得る活動）市場をつくる。
- 幸せになる教育（ポジティブエデュケーション）：どうしたら、皆が幸せになるか。Well Being.
- ファンドレイジング（持続可能な資金・資源循環）：持ち出しがないように。儲ける仕組み：資源循環。地域活動を通して資金を得て、それを地域に還元することで、お金をさらに生み出す。ファンを増やして、お金を増やして、事業を継承し、さらにファンを増やす。

写真 7：上田先生の「印象に残ったこと」に関するまとめスライド

続いて、二つ目の「長沼で取り組みたいこと・検討したいこと」ってところのお話です。十分に聞こえていない部分もあったかと思うのですが、ここも、やっぱりまちをどうしたいかってところが非常に大事になってくるかなと。その派生的なこととして、外部の例えば会社を取り入れる必要もあるかな、とかそういうようなご意見も出ていましたけれども、結局、こういうまちを目指します、そのためにどのような推進者が必要か、ということをごどう見つけるかっていうところが出てくるわけです。

平福については私じゃ詳しく知らなくて申し訳ないんですけども、やっぱり長い歴史があって、今の状態があるわけで、時々おっしゃっていましたが、「少しずつ少しずつ」で、やっぱり最初は持ち出しみた

いなものも通常は必要になってくるんだろうな、と思います。要するに収益をうまくいる得るために時間がかかるということです。でも、その最初の段階からちゃんと持ち出しがないような収益を得るような仕組みで実施する、という明確な姿を描くことが大事ですよ。

なので、えっとよく言われるのは最初のいわゆる「イニシャルコスト：最初の投資」のところで、丹波のぼんぼ好さんが最初は補助金を使って、でそれと同時にランニングコスト的に継続できるような仕組みっていのをうまく組み合わせて進めていくってようなことです。助成金などの活用を組織の成長にうまく活かしていくということで、このあたりの話も今後していければと思います。

そこをどうやってうまく組み立てられるかなってところが、地域の中でいろいろできればいいんですけど外部の支援なども必要っていう風に、あるいは協力を得たいっていうふう考えた場合もあるわけです。最近あのなんて言いますかね若者なんかもいろいろ起業とかそういう新しいアイデアをもって自分で取り組んでやっていきたいという方も増えていたりするので、それであれば、活用のアイデア段階から意欲のある人たちを呼ぶ、という方法もあります。例えば、スタートアップ拠点として開放する、というものもありますし、或いは〇〇を活用するコンテストを考えましょう、だとか、ですね。これ一つの例なんですけれど、要するに多様な人の参加を最初の段階から促していくことが重要になるかと思います。

今の例えは、米澤邸の修繕の段階でも、いろいろボランティアを巻き込んだりだとか。そうやってみんな「これを大事にしていきましょう」、「これを修復していきましょう」、「生かしていきましょう」っていう理念を共有して、計画だとか作っていく段階から巻き込みを図るっていう、そこが今もされているんだろうと思います。今後も大事になっていこう、というところですよ。

次に川育の話です。防災ステーションや養水の活用の一部の活動になると思いますが、これは兵庫の例でもよくあるんですけど学校と地域連携は欠かせないですね。

地域・学校連携で学校教育の中で必ず防災学習の時には訪問させましょう、となると、今度は行政との連携も必要になってくるわけです。ただ、こういう教育活動でお金を集めるってすごく難しいんですね。シーズアジアもそうですが。これは課題になっていて、どうやって集められるかっていうまい方法っていうのはなかなか実は難しい部分があります。私個人的に思っているのは、やはりそこが行政との連携が必要になるところですね。

最後、直売所だとかそういうあたりの話で非常に面白い話が出てきたなって思っています。若者とかが集まる場所だとかまあそういうのであのそれも資源として活用できるんじゃないかっておっしゃっていて、たぶん検討されているとは思いますが、そういう今出されたいろいろな資源を活用するにあたり、どうやって人を呼び込むような、そういう仕組みを作るかっていうのもやっぱりすごく大事なポイントだと思います。

振り返りのポイント（長沼で取り組みたいこと）

<米澤邸>

- 「まちをどうしたい」（例えば平福：川を大事にしたい、川と共生した伝統を大事にしたい）。
- 推進者・変革者（Change Agency）になる。受け身ではなく、能動的に。他者の巻き込み。
- ※3人集まれば、まちづくりはできる。
- 持続可能な運営が必要 ⇔ 最初は持ち出しも、というのが一般的（収益得るまで時間がかかる）
- イニシャルコスト（助成・補助）＋ランニングコスト（会費・サポーター・寄付、事業収入）
- 活用のアイデア段階から、意欲のある人達の巻き込みを図る方法もあり（起業・コンテスト）

<川育・防災ステーション・用水路>

- 「共生」自然との共生（川との共生）＋ Social Capital（社会関係資本）：域内の方々との共生、行政との共生、域外との共生。
- 学校連携、地域連携（学校教育・生涯教育）。
- 防災だけではなく、様々な活動に防災のエッセンスを（Mainstreaming DRR）。

最終ワークショップ写真 8：上田先生の「長沼で取り組みたいこと」のまとめスライド①

振り返りのポイント（長沼で取り組みたいこと）

<直売所>

- 若者などが集まる資源（イベント、ワークショップ）
- 他の資源とどうつなぐか（まち全体を観光資源に）

<住民の理解>

<まちづくり会社>

<協力会社>

- 行政連携→受け身ではなく、共につくる。

<クラウドファンディング>

<ない補助金>補助金を作り出す。

最終ワークショップ写真 9：上田先生の「長沼で取り組みたいこと」のまとめスライド②

そういったところですが、ちょっと長かったですかね。ごめんなさい。以上です。

大津山：上田先生今日は本当にお忙しい中、参加いただきましてありがとうございます。講評で詳しくまとめ、かつ最新の知見や重要な事項についてもご共有いただいて有難うございました。

チェックアウトの時間が迫っているので、では一旦ここで切りますが有難うございます。では！



最終ワークショップ写真 10 : 全てのプログラムを終えて集合写真

完